

はじめに

筆者の育った家庭は、父は熱心なクリスチャンであったが、母はほとんど宗教に関心を持っていなかった。祖母（父の母）は、仏教や神道の伝統行事を好み、しばしば、神社仏閣へ筆者を伴ってお参りしていた。こうした環境の中で、自然に聖書にも経典にも親しむようになっていった。高校生の時に不思議な本を読んだ。浄土真宗の僧からクリスト教の牧師になった人が書いたもので、親鸞の教えは、クリスト教そのものであると記されていた。仏教とクリスト教の思想には相違点も多いが、類似点も多いということをその本から学んだ。

高校卒業後、紆余曲折を経て大学へ入学し、卒業後は何んとか就職したが、公務員としての出発点は、東京都内でも有数の大規模小学校の事務職であった。学区域に第二種都営住宅を抱えていたため、生徒の約四分の一は貧困家庭、生活保護受給世帯か、いわゆるボーダーライン層であった。そうした中で、社会福祉に関心が高まり、結局は、福祉事務所のカースワーカーとなった。その後、障害者福祉も経験し、縁があつて、大学で教えるようになった。

生活保護や社会福祉の政策の授業では、制度の歴史をまず教えるが、それはまた、社会や民族が半ば無意識に共有している思想を確認することでもある。例えば、現在居住している青森の津軽地方では、三世代家族の割合が大きい。女性の結婚年齢は日本で最も低く、大半は高校卒業後二年以内に結婚し、兄弟、姉妹とも実家や婚家で生活することも多い。ここでは、高齢者の介護は、家族全員で行うことが普通のことになっている。家族の自助と親族縁者間の互助があつて当然のことになっている。

こうした精神風土が歴史的にどのように醸成されたかについて、興味関心を持ち続けてきた。自身の生育環境から宗

教がそれに大きな影響を及ぼしていることも感じていた。そこで、今回、キリスト教、大乘仏教と儒教における貧困観や貧困救済について、原典の記述を再確認する作業を行うことにした。キリスト教、仏教、儒教という伝統宗教が持つ貧困観や貧困救済思想を、原典を参照することで浮かび上がらせ、さらに現代の社会保障制度の設計思想に接近することを試みることにした。

参照文献は、できる限り一般書店で普通に入手可能なものに限った。また、とりわけ大乘仏教経典は、膨大な量であるため、文庫として出版されているものを主として利用することにした。聖書、経典、論語等の引用は、名称と章節を明示して、読者がすぐに原典にあたれるよう配慮している。他の引用文献は、引用の直後に著訳者、初版出版年とページを記載している。これは社会学会の引用方式に準拠している。なお、引用については、ルビは原則として省略し、文末については文章の続きぐあいによって補正した場合がある。

二〇一二年八月

増山 道康

社会保障の源流を探る

—— 教典に描かれた貧困観と貧困への対応 ——

目次

はじめに

1

序 章 貧困の定義と貧困への対応

11

- 1 現代の貧困と貧困観、貧困への対応 12
- 2 貧困への対応（社会保障） 14

〔第一部 聖書の貧困観と貧困救済〕

第1章 旧約聖書に描かれた貧困

18

〈コラム1 旧約聖書の構成〉 19

- 1 貧困の原因——個人の責任と集団の責任 22
- 2 貧者の保護と貧困の状態 23
- 3 厄災の原因と結果 24
- 4 厄災の種類 27

第2章 アポクリファ（旧約聖書統編）に描かれた貧困

30

〈コラム2 アポクリファと芸術〉 31

- 1 貧困の原因 32
- 2 貧困の保護と貧困の状態 32

| | | |
|---|----------|----|
| 3 | 厄災の原因と状態 | 33 |
| 4 | 清貧と試練 | 35 |

第3章 新約聖書に書かれた貧困

〈コラム3 聖母マリア〉

| | | |
|---|------------------|----|
| 1 | 貧困の状態 | 40 |
| 2 | 神の厄災 | 44 |
| 3 | 山上の教え | 46 |
| 4 | 貧しいやもめの挿話とラザロの挿話 | 48 |
| 5 | 積極的な清貧 | 50 |
| 6 | 労働の対価と能力のある者の貧困 | 51 |

第4章

旧約聖書とアポクリファにおける貧困への対応

〈コラム4 イスラエル(ユダヤ)の十二部族とパレスチナ〉

| | | |
|---|--------------------------------------|----|
| 1 | 神の救済 | 55 |
| 2 | 貧困救済の法律 | 57 |
| 3 | 貧困救済における道徳律 | 59 |
| 4 | 具体的な方法1——ヨセフの挿話(古代における国家救済(社会保障の萌芽)) | 63 |
| 5 | 具体的な方法2——ルツ記(共同体による援助(律法の具体化)) | 64 |
| 6 | 富者の義務——トビトによる子どもへの論し | 66 |
| 7 | 王の施策 | 67 |

第5章 新約聖書の貧困救済

〈コラム5 最初のクリスチャン〉 70

- 1 カリタスの本質——コリントの信徒への手紙Ⅰ 71
- 2 イエスと十二使徒の救済——ことばと奇跡 72
- 3 具体的な救済方法——相互扶助の現れ〈社会連帯〉 75
- 4 救済原理としての愛Ⅰ——放蕩息子 77
- 5 救済原理としての愛Ⅱ——善きサマリア人 78

〔第2部 仏教の貧困観と貧困救済〕

第6章 初期経典にみる貧困とその救済

〈コラム6 解脱の境地〉 83

- 1 貧困の状態 83
- 2 貧困の原因 84
- 3 清貧 85
- 4 救済の方法と道徳 86

第7章 大乘経典にみる貧困と貧困観

- 1 法華経にみる貧困の状態 88
- 2 法華経にみる貧困の原因 90

〈コラム7 仏陀の称号〉 90

- 3 般若経典、浄土経典にみる貧困の状態 91
- 4 般若経典、浄土経典にみる貧困の原因 92
- 5 その他の大乘仏教経典や論にみる貧困の状態 93
- 6 その他の大乘仏教経典や論にみる貧困の原因 94

第8章 大乘仏教経典に描かれている貧困への対応

- 1 仏陀による救済 96
 - 2 菩薩による救済 100
- 〈コラム8 観音菩薩〉 101

第9章 大乘仏教経典にみる貧困救済の理念と実践

- 1 救済の理念 108
 - 2 救済の具体的な方法 109
 - 3 民衆の要求と為政者の姿勢 111
- 〈コラム9 行基〉 112
- 4 援助者の倫理 113

第10章 中国古典にみる貧困観と貧困への対応

- 1 伝統的な貧困観と為政者による恣意的な救済 117
- 2 諸子百家にみる貧困と対応 119

- 3 儒教にみる貧困観と貧困への対応 123
 〈コラム10 司馬遷の儒教評価〉 123

〔第3部 現代の貧困への対応の基盤としての宗教〕

第11章 貧困対応としてのソーシャルワークとキリスト教

- 1 ソーシャルワークの意味 129
 2 ソーシャルワークの初期理論の中にみるキリスト教 130
 〈コラム11 社会回勅とソーシャルワーク〉 131
 3 ソーシャルワーク原則と聖書との関係 131

第12章 仏教とソーシャルワーク

- 1 ソーシャルワーク原則と仏教と儒教 139
 2 法華経におけるソーシャルワークの関係性 140
 3 菩薩行を基礎とするソーシャルワーク原則 143
 〈コラム12 朝三暮四の勧め〉 146

おわりに

参考文献